

---

# 鈴ちゃんのポッケ

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴ちゃんのポッケ

### 【ZPDF】

Z0824M

### 【作者】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

鈴ちゃんは中学校のメンタルセラピスト。

僕は卒業間近の中学生。

鈴ちゃんの白衣のポケットには、五百円玉と指輪が入っているって噂。

だから、彼女が歩くとつも、ちやりりりんつて音がする。

美鈴ちゃんの白衣のポケットには、いつでも指輪と五百円玉が入っているらしい。だから彼女が歩くと、ちやりりん、と軽い音が零れて落ちる。明るい校舎内を小さな鈴に似た音を立てながら彼女は行くので、鈴ちゃん、と呼ばれていたりする。

彼女の居場所は大抵が保健室だ。だけど保健の先生って訳じゃない。メンタルセラピーとかいう、思春期の僕らのような人間に大切だと思われる仕事をしているようで、相談がある生徒なんかは鈴ちゃんの所に行くそうだ。登校拒否っぽくなっている奴も、鈴ちゃんに保健室で授業を見てもらったりしている。すっぴんに真っ赤な口紅だけを塗っている彼女は、太くて黒い髪をいつもポニーtailにしていて、結構男らしい顔立ちをしていて、骨格ががっちりしている。理科の先生みたいな白衣を着て、女にも男にも見えるそんな不思議な存在で、鈴ちゃんはいつも笑っている。

「鈴ちゃん、」

「はいよ、なんだ紺野か」

一階の廊下を歩いていた鈴ちゃんに声をかけたら、職員室に向っている様子だつた彼女は立ち止まって僕の顔を見た。特に用がある訳ではない僕は少し困つて、ええっと、なんて彼女を呼び止めてしまった理由を今更考えたりする。

「もうすぐ卒業だね」

「おう、あんたがね」

客観的な物言いをしなさんな、わたしは卒業しないんだから、と鈴ちゃんが笑う。

「高校は決まった?」

「うん、推薦で決まった」

「そつか、じゃあ卒業までのんびり出来るんだ」

なぜか一年二組の名簿帳を胸に抱えている。いつも暖かいと眠くな

るね、と鈴ちゃんは大きく伸びをした。白衣のポケットで、また、  
ちゃりりんと中身が鳴る。

「なに、わたしの顔に何か付いてる?」

「ううん、」

その顔を見ていたら、鈴ちゃんに不思議そうな顔をされた。

「あ、分かった、あんた次の授業英語でしょ」

「え、」

「ははあん、サボりたいんだな? いいよ、保健室おいで。田中の  
ババいなんだよ、わたしが代わりだから。紺野なら仕方ないから  
こっそりベッド貸してやる」

僕と鈴ちゃんが仲良くなつたのがいつだつたかなんて覚えていな  
いけれど、僕は彼女のお気に入りである事は確かだつた。そういう  
のは空氣で分かる。そして僕も、かなり年齢不詳な彼女の事が気に入  
つっていた。二十代後半だろうけれど、もしかしたらもつと年上か  
もしれないし年下かもしれない。

「次の授業、英語じゃなくて社会科だよ」

「別に何だつて良いや、あんたがサボりたいならおいでよ」

チョコレートとか食べたいんなら出してあげるよ、と甘い誘惑を  
鈴ちゃんはする。僕をまだ小学生かなにかと勘違いしているようだ。  
だから僕も嬉しそうな顔をしてやる。鈴ちゃんは美人ではないけれど、  
可愛い顔でもないけれど、ちょっととなんて言うか、いい。

「じゃ、わたしは職員室に名簿提出してから行くのさ」

先行つて待つてなよ、と保健室の鍵を渡してくれる。最近の保健  
室は常時鍵が開いている訳ではないのだ、薬だつてあるし、先生が  
いない時に勝手に入り込んでサボり場にされるといけないかららし  
いけれど、鈴ちゃんはそんなに僕を信用し過ぎて鍵なんかほいほい  
渡してくれても良いものなんだろうか。特別扱いつぼくて、僕は嬉  
しいけれど。

鍵は赤いプラスチックのキーホルダーが付いていて、保健室、と  
マジックで書いてある。それはとても軽くて、頼りない感じが鈴ち

やんに似合わないと僕は思ひ。

サボりたかった訳ではないけれど、誘われてしまつたら行かない訳にいかない。

四時間目のチャイムが鳴り終わつて少し経つてから、鈴ちゃんは戻ってきた。多少急ぎ足で、ちやりりん、ちやりりん、とポケットを鳴らしながら。

指輪と五百円玉、と噂されているけれど、中身を見た事は誰もないと思う。僕だって見た事がない。そういえば鈴ちゃんと仲良くなつてからも、その事を聞いた事はなかつた。

「ただいま。どうする、『ヒーヒー』でも飲む？」

さすがに学校だから酒は置いてないんだよ、と戸棚をさりそく引つ搔き回している彼女に、僕は好奇心丸出しで聞いてみる。

「なんでそのポケット、いつでもちやらちやら音がすんの？」

「あ？ ポケット？ そりや中身が入つてるからだよ」

はぐらかされたのかな、と思いつつ、ベッドの上に寝転がる。消毒液の匂いと、湿っぽいシーツの匂い。昼間の学校なのに、保健室だけは空気が違う。まるで夕暮れと夜の隙間みたいな匂いがする。

「もうすぐ卒業つて実感ないなー」

「わたしなんか毎年卒業していく生徒見ながらずつといつて困つぱなしだよ」

「置いてかれるのは寂しい？」

何気なく言つた言葉だったのに、鈴ちゃんの手が止まつた。戸棚が中途半端に、だらりと扉を開いたままにされている。

「……寂しいよ」

ちやりりん、とポケットの中身が鳴つた。

「中身、知りたい？」

噂通りなんだけどね、と彼女は笑つたけれど、それはいつもの笑顔ではなくてひどく寂しそうな表情だった。

「わたしをね。迎えに来るつて言つた卒業生がいたんだよ、昔。お

小遣い貯めて指輪をくれてね。つて言つても安物なんだけど。シルバーの。ふたりで買い物に行つたんだ、バカみたいでしょ、本当にそんな子供に、わたしは恋をしちやつたんだ」

五百円はそいつがいつもわたしに毎ご飯を忘れては借りに來ていたお金で、それをポケットにずっと入れてさえいれば、と。

「……あの子がまたひよつこりやつてきて、『美鈴ちゃん、弁当忘れた金貸して!』って来るような、そんな気が、」

最後の言葉はとてもとても小さな声だった。僕は軽々しい気持ちで聞いてはいけなかつた事なのだとよつやく気付く。慌ててベッドから飛び起きて、『ごめんと謝りうとしたけれど、鈴ちゃんはそんな僕より先にこちらへ来てベッドの端に腰掛けた。

ちやりり、ちやりん、と揺れる白衣のポケットから軽やかな音を立てて。

「鈴ちゃん……、」

声をかけたら泣きそうに見えたのだ、だけど僕は沈黙の方が恐かつた。すぐそばにいるのに、彼女がひどく遠いところへ行つてしまつたような感じがして。いつも笑つている鈴ちゃんにも、そんな辛い恋が。あつたなんて。

「なーんてね、嘘だつてばー。」

「……え、あ?」

上半身だけを起して、どうしていいのか分からぬままにいた僕を彼女は振り返る。そして、いつもの顔よりもっと悪戯な表情で大きく笑つた。

「紺野、あんた騙されやすい男になりなさんよ、悪い女は世間にいっぴいいるんだから」

「鈴ちゃん、え、なに、嘘?」

「わたしがそんな昔の恋なんかずつと引きずつてゐるもんか」

あつはつは、と笑い飛ばす、鈴ちゃんは男らしくて豪快だ。

「嘘、か……」

拍子抜けして、ついでに身体からも力が抜けた。今、僕は変なこ

とを聞いてしまった罪悪感でいっぱいだったというの。消毒液の匂いが微かにするベッドへ頭を落とすと、固いスプリングの感触がする。

なんだ、ともうひとつ呟いた時、ベッドが軋んだ音を立てた。目だけを向ければ、鈴ちゃんが僕の隣へ倒れ込むといひだつた。ワンテンポ遅れて、ベッド全体が一度大きく揺れる。

「ところで紺野、」

あんたまだ童貞？ と聞かれて、僕は一瞬、道程、の字を頭の中で変換した。すぐに本来の意味に気付いて、耳が熱くなる。

「なつ、鈴ちゃん、なに言つて、」

「もしかして、キスもまだ？」

「鈴ちゃん！」

からかわれているのだと知つていながら、僕はつい大きな声を出してしまつ。こういう時は冷静に対処した方が、相手もつまらなくなつて構つのをやめてしまつと知つているのに。

鈴ちゃんの手が伸びて、でもちゃんと位置を把握できていなかつたのだろう、適当に伸ばされたそれは僕の頭の端っこ辺りを撫でた。「どうせ卒業じやん」

「どうせつて、」

「童貞も卒業していけば？」

「なんて事を言つ……」

だつてわたしを、どうせ紺野も置いてこないのでしょう、と真面目な声が返ってきた。それまでは、どこか面白がつてこるような口調だつたのに。

返事ができないでいると、鈴ちゃんは一度起き上がって僕の上に覆い被さつてきた。ポケットの中身が、また軽い音を立てる。頭はパニック、そして身体の一部はいきなり暴走の準備を始め、けれども鈴ちゃんのポニーテイルからは柑橘系のシャンプーの匂いなんかしてしまい。僕は混乱しつづけてしまつ。

近付いてきた唇なんて、どうやって回避すればいいのだと、

僕にだつてしてみたくない理由が特にあつた訳でもないのに。

「みんな、卒業しちゃうんだもんな……」

僕と鈴ちゃんの顔は数ミリでくつこてしまいそうで、そんな状態で喋ると耳ではなく肌が声を拾つよつた。ゆっくりと重なつてしまつた唇は、思つていていたよりずっとじゅうとやわらかくて、甘い気がした。

目を閉じて鈴ちゃんの唇を感じながら、きっと彼女と約束した生徒は本当にいたんだろうな、と思つた。彼女は待つてゐるのだ、ここで。白衣のポケットを、いつも鳴らしながら。平気な顔をして。大きく笑つて。だから、この学校を卒業した後もちゃんとたまには顔を出そう、と心に決めた。鈴ちゃんが寂しくなり過ぎないよつた。その後僕が童貞を卒業してしまつたかどうかはまた内緒の話だけれども。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0824m/>

---

鈴ちゃんのポッケ

2010年10月8日14時38分発行